

# 遠隔地間の家族団らん

——異世代・異世帯間コミュニケーションとテクノロジー——

砂 川 千 穂

キーワード：ビデオ会話、言語人類学、団らん、テクノロジー

## 1. 初めに

昨今、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界中に広がり、私たちの生活スタイルは大きく変化した。これにより、社会言語学の研究テーマである、人とのつながりや、コミュニケーションの取り方も変化するのではないかと予測される（岡田・岡崎・高木・生越 2022）。実際に会ってコミュニケーションをとることがはばかれるコロナ渦で、従来、対面場面を基軸に、調査、分析をすることが多い言語人類学や社会言語学の研究の理論や分析方法を検討することは重要な課題であろう。本論は、こうした時代背景に鑑み、家族コミュニケーションとデジタル機器の使用の相関関係について考察する。特に、異世代・異世帯間における、ウェブカメラを介した家族会話のデータを分析し、対面場面を前提として形成される家族の団らんの場が拡張し、遠方の家族を巻き込んで構築される手続きを明らかにする。

家族同士の団らんのコミュニケーションは、対面場面で、参加者が車座に座り、楽しく食事をしたり、語り合って時を過ごすことを示唆する。しかし、参加者の一部が、その場におらず、ウェブカメラを通した遠方の空間にいるような場合、団らんの場はどのように形成されるのだろうか？ 本論では、日本とアメリカに離れて暮らす家族がウェブカメラを使って、物

理的な場所の枠を超えた団らんの環境を構築する手続きを明らかにする。特に、ウェブカメラの置き場所や、発話、身体的位置を調整し、環境の資源を相互行為の中で調節する手続きを明らかにする。また、その手続きが、参加者の家族内の役割の認識をどのように指標しているかを考察する。

## 2. データ収集と分析方法

筆者は日本とアメリカで、離れて暮らす家族のつながりを調査するため、定期的にウェブカメラを使用している世帯を対象に、エスノグラフィーの手法を用いて長期に渡り観察した。頻繁に参与者宅に訪問し、家族から聞き取りし、実際に家族らがウェブカメラを介して会話している様子を観察・録画したものを、データとして詳細に書き起こした。

本論で注目するのは、村野家の祖父母、親世代、子世代を含む三世代のビデオ会話である。村野家には、三人の子どもがいる(図1)<sup>1</sup>。祖父母は広島に住んでいるが、子ども達は結婚後独立し、長男の敦は東京、次男の洋介は広島県内の他都市、長女里美は、アメリカに住んでいる。長男の敦には息子レン(2才半)がいる。レンは母、聡子の強いすすめもあり、頻繁に広島の敦の実家を訪れている。次男の洋介は息子、結太(3才)がいる。長女里美は、家族とアメリカ在住である。息子の優がうまれたばかりであり、しばらく日本に帰省できない日々が続いている。

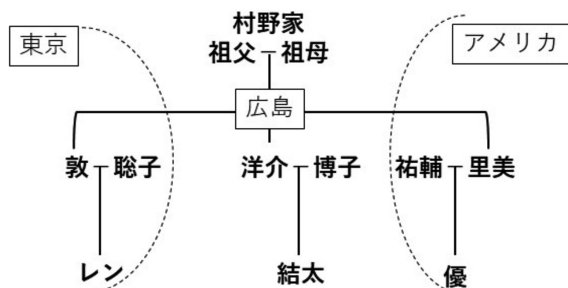


図1 村野家の家系図と居住する場所の関係

筆者は、主にアメリカの里美宅、東京の敦宅に出向き、三世代のビデオ会話の様子を観察した。データ収録時には、それぞれの家の空間を全体的に録画できる場所にカメラを設置した。また、参与者に、データ収集の方法を説明し、予定していた時間以外に、ウェブカメラを使う時に、研究用ビデオカメラで録画してもらうよう依頼した。ウェブカメラを投射するコンピュータ画面の映像も可能な限り近距離で録画し、ビデオ会話の全体像を理解する資料とした。書き起こしは、参与者の地理的な配置と、相互行為の流れを可視化した。

### 3. 遠隔コミュニケーションの言語人類学的研究

本論は、ウェブカメラを介した家族会話を、言語人類学的なアプローチを用いて分析する。ビデオ会話によるコミュニケーションの実践は、学際的アプローチで様々な分野で研究されてきた。特にインターネットの発明は、社会に新たな「革命」をもたらしたと言われるように (Crystal 2001)、インターネットを介したコミュニケーションの日常化によって、それまでの言語使用パターンや、社会活動の秩序にも大きな影響を与えた。例えば、ろう者は、ウェブカメラ越しの会話では、画面のスペースに限りがあるため、身体前方の手話空間が必ずしも十分に映らないことがあり、対面時より指文字の使用度が増える傾向にあることが報告されている (Lucus et al. 2013)。すなわち、対面でのろう者の話し方と、ウェブカメラ越しの話し方には、明らかに手話の使い方に違いが観察されるのである。また、若者のスマートフォン使用実態を調査したエスノグラフィー研究によると、人と待ち合わせるといった社会活動も、時刻と場所をあらかじめ決めて、そこに人が合わせることで達成されるという、ピンポイントのタスクではなく、待ち合わせに向かう時間の中で、スマートフォンのテキスト機能を使いながら、時刻と場所が徐々に決定されるという相互行為に変化している (Ito & Okabe 2005)。

こうして IT 技術の発展により、人々の生活にインターネットやコン

ピュータ、スマートフォンなどのデジタル機器は日常に欠かせない存在になった。言語人類学的アプローチでは、最近になるまでメディアにまつわる事象を研究対象として十分に扱ってこなかった (Cook 2004; Wilson & Peterson 2002)。それは、エスノグラフィーの実践の場が対面場面を前提としていたことと関係があるであろう。文化的な思考パターンは、人々の対面場面における日常的なコミュニケーションで観察可能であるとされてきた (Sunakawa 2020)。本論では、場の形成に必要な要素は、単に地理的な場所や、参与者同士がコミュニケーション時にいる場所に制限されるべきものではないと考える。コミュニケーションの場は、場所や、人の姿といった、目視できる指標のみで形成されるのではなく、相互行為の調整される中で創造されるものであろう。藤井 (2020:61) によれば、「場」思考的言語行動は「自己と他者が場において共存在しているという感覚のもとに、主客が明確に別れることなく、自他融合的に共鳴・共振しながらすめられ、創出される」という。ウェブカメラ越しの団らんの場の場合も、バーチャルな参与者は実空間の参与者と共鳴しながら、日常的な団らん空間を形成している。このような視点に基づき、インターネットと、ウェブカメラを使った使った家族団らんの場を、現代の家族の日常を観察する重要な場面と位置づける。

#### 4. 団らんの実践と社会化

団らんということばが示すように、家に家族が集まると、こたつや食卓といった家の共有空間に、その場に参与者が等しく参加できる場を生み出す。そうした団らんの場を典型的に引き起こす活動は、食事であろう。従来の言語学や人類学の研究では、食事の時間を共にすることや、食卓の会話が家族関係の構築や文化的な価値観の伝承と社会化の場であることが明らかになっている (Ochs & Taylor 1996)。日本では、戦前においては食事中的会話は行儀が悪いとされてきたものの、戦後、洋式の生活スタイルの普及にともない、食事中的会話が日常的になってきた (表 2010)。近年で

は、離れて暮らす家族が、ビデオ会話越しに高齢の親と遠隔共食することが幸福感の向上につながることが明らかになり、工学的アプローチからも食卓を囲むことの重要性に注目が集まっている(徳永 2022)。

## 5. ウェブカメラの介在する相互行為における団らん

前述したように、団らんとは、多人数が集まって車座になり、コミュニケーションを図ることである。団らんの空間が構成される仕組みを理解する上で有益な枠組みの一つに、F陣形(F-formation)の考え方が挙げられる(Kendon 1990)。Kendon は、屋外のオープンな空間において、人が集まって会話するとき、人々は円陣を組む点に注目し、これをF陣形と呼んだ。F陣形は、参加者がそれぞれの身体の前方に投射される操作領域(transactional segment)を重ね合わせることでできあがる陣形のことである。この操作領域とは、人が何かしらの社会活動を実行するときに必要な、身体的な空間のことで、他人の介入は不適切であるという社会的規範がある。例えば、ソファに座ってテレビを見ている人がいる場合、他者は、鑑賞者の前にたちはだかることは不適切である。すなわち、テレビと鑑賞者の間にある操作領域は、他者にも理解可能な形で存在し、社会活動を達成させるために重要な空間である。

Kendon のF陣形研究で最も重要な貢献は、参加者の身体的配置と、相互行為の相関関係を明らかにした点である。会話の実行にはそれぞれの場面における適切な空間が必要であり、会話が展開していく限り、参加者は自身の操作領域を共有し、その共有・調整し、維持し続けようとするのである。Kendon の研究は、家具や壁などが無い、開かれた空間で、人々が立って会話する場面を扱ったものであるが、Kendon の考えを応用・発展させた、最近の研究では、F陣形を、単に身体同士が形成する空間にとどまらせるのではなく、外界の環境に位置づけて考察する試みが盛んである(牧野・砂川・徳永 2022)。例えば、博物館のような環境では、参加者は、自由に会話するだけでなく、鑑賞対象の展示物に、一時的に焦点を当てる

必要がある(牧野 2022)。すなわち、展示物を鑑賞している時は、参加者の身体だけでなく、展示物そのものを含めたF陣形が形成される。このようなF陣形の形成は、静的なものではなく、相互行為が進むにつれて、その変化に適応するように、調整される。学会のポスター発表のような場面では、相互行為中の活動が発表から質疑応答に変化すると、参加者は展示物を含まない異なるF陣形を作り出すことが明らかになっている(坊農 2009)。

このように、対面場面を環境に埋め込み、その環境の特性や、相互行為に関係するモノをも含めた包括的アプローチが発展する一方、本論が対象とするウェブカメラを介した家族コミュニケーションを理解する上では、対面場面を基軸に発展したF陣形や参与枠組みといった既存の理論枠組みは必ずしも当てはまるわけではない。ウェブカメラは、遠方の参加者が見る視界を形成する、いわば、目の代わりであり、一方で、ウェブカメラの埋め込まれているコンピュータは、相手の姿と音声をこちら側に投影する、遠方参加者の存在の代わりとなっている。このような電子機器の役割を考慮すると、ウェブカメラを実空間のF陣形の形成や参与構造の構築に必要な道具的モノと考えるのか、実空間の参与構造を拡張し、ウェブカメラの向こうの参加者も包括的に含んだ、ボーダレスな参与構造を全体像とするのか、検討の余地がある(井出・砂川・山口 2019)。本論では、ウェブカメラの介在する家族コミュニケーションにおける、団らんの構築手続きを理解するため、後者のアプローチを採用する。団らんということばが指標するように、家族が自然と集まって会話する場合にどのような、陣形を構築するのかを分析を通して明らかにする。

## 6. ウェブカメラを介した団らんの場の成立

遠隔地にいる家族を、実空間の家族の輪に取り込み、団らんの場を共有するためには、ことばや環境を微細に整備する必要がある。具体的には(1)ウェブカメラと身体配置の調節による団らんの陣形の構築、(2)ウェブカ

メラの日常環境への埋め込み、そして(3)空間をまたいだ発話調節が必要である。本節では、村野家でのビデオ会話のデータベースを使用し、実空間の参与者と、相手の空間の参与者が、どのようにお互いの発話や行動を観察し、適切な環境調整を行っているのかを分析する。

### 6.1. 団らんの陣形の構築

本節では、村野家のお正月の集まりに焦点を当て、団らんの陣形がどのように構築されるのかを分析する。村野家の独立した3人の子どもが、それぞれの家族を連れて、広島 of 祖父母宅に集まっている。長女の里美が、アメリカ在住のため帰省できず、代わりに、村野家とウェブカメラで接続している。祖父母の居間中央には、こたつが設置され、長男敦と妻の聡子、息子のレン(2才半)、次男洋介の妻の博子とその息子の結太(3才)、じいちゃんがそれぞれこたつの周辺で、別の活動している。図1は断片(1)の発話が開始する直前の20秒ほどの様子を表している。データ画像に写っているじいちゃん、敦、レン、博子は、それぞれ別の方向に視線を向けている。博子と、画面には映っていないが博子の息子(結太)が遊んでいる方向に視線を向けているように見える。一方敦は、じいちゃんの向かい側に座り、息子のレンと、ごっこ遊びをしている。敦の前には、ノートパソコンが設置され、そこには、アメリカ在住の里美の自宅の様子が、画面越しに映し出されている。里美の家には、里美の夫の祐輔と、うまれたばかりの優がいる。図1では、ビデオ接続後に、里美が夕飯の準備のため、画面から姿を消したため、里美の家の中の様子は映っているが、里美の姿は見えていない状態である。

この段階では、家族全体としての団らんの陣形は成立しておらず、それぞれが別の活動に従事しており、多様な方向に身体を向けた、家族内の空間を形成している。これは Goffman のことばを借りれば、単一の共通目的を持たない、焦点のさだまらない相互作用(unfocused interaction)といえよう(Goffman 1961)。焦点のさだまらない相互作用の状況においては、一

見それぞれがバラバラの場所で思い思いに行動しているように見えるが、参与者同士が全く関係なく存在するのではなく、お互いを観察し、いつでも焦点の定まった相互作用 (focused interaction) に変化する可能性を含んでいる状態である。



図1 こたつ周りの焦点の定まらない相互作用

実際、断片(1)に示すように、図1の焦点の定まらない相互作用も、ウェブカメラの向こうの里美の発話をきっかけに、変化していく。断片(1)は、図1の20秒ほど後に開始された会話の書き起こしである。敦がレンとごっこあそびをしていると、室内に、里美が「( )しよるよ」(1行目)と言うのが聞こえる。この発話をきっかけに、じいちゃん、敦、博子、聡子が、協力して二人の子ども(レン、結太)を画面の前に移動するように促し、里美とビデオ会話越しに対面させようと試みる。

まず、里美の発話直後、画面手前にいて図1には映っていない敦の妻、聡子が、博子の子どもの結太に声をかけ、「結くんほら里美にあけましておめでとう言った？」(2行目)と結太をノートパソコンの方に誘導する。それをうけ博子もその誘導発話に参加し、立ち上がってノートパソコンを指さす仕草を見せる(図2、3行目、図2)。興味深いのは、里美の発話に答



えるべき宛て手を、聡子が主導して選択している点である。さらに、聡子は、2行目でまず、自分の子どものレンではなく、甥の結太に、声をかけている。

## 断片(1)

広島		アメリカ	
1		里美	( )し よるよ＝
2	聡子	＝結くん(.)ほら[里美にあけましておめでとう言った？]	
3	博子	[ ((立ち上がり、ノートパソコンを指さす)) ]	

図2



図2 博子の指さし

断片(2)は断片(1)の続き部分である。聡子に続いて、こたつの周辺にいる、敦、博子、じいちゃんが、それぞれ、子どもを里美の映るノートパソコンへ誘導しようと試みる。まず4行目では、レンとのごっこあそびを切り上げた敦が体を起こし、レンの背後に手をやりながら、「これだれ？」(4行目)と呼びかける。博子はこたつのまわりを片付けながら、息子の結

太に「結君ほらレン君とこ行ってみ」と声をかける。結太はすぐにはこたつの近くに現れず、博子は3秒後さらに、「里美ちゃんが見えたじゃろさっき」(8行目)と、レンの近くに行くだけではなく、そこに設置してあるノートパソコンに映っているはずの叔母の里美の所へ行くように促す。同時に、じいちゃんもゆっくりと起き上がり、「ほれほれここ見てみ」(9行目)と、未だに床に寝そべっているレンの方へ視線を向けながら、ノートパソコンの上部を指さす(図3)。

## 断片(2)

- |         |                                  |
|---------|----------------------------------|
|         | これだれ？                            |
| 4 敦     | ((起き上がりレイを見る))                   |
| 5 レン    | ((寝転がる))                         |
| 6 博子    | 結君ほらレン君とこ行ってみ<br>((こたつまわりを片付ける)) |
| 7       | (3. 0)                           |
| 8 博子    | [ 里美ちゃんが見えたじゃろさっき<br>[ ほれほれここ見てみ |
| 9 じいちゃん | ((起き上がる；ノートパソコン上部を指で差す))         |

図3

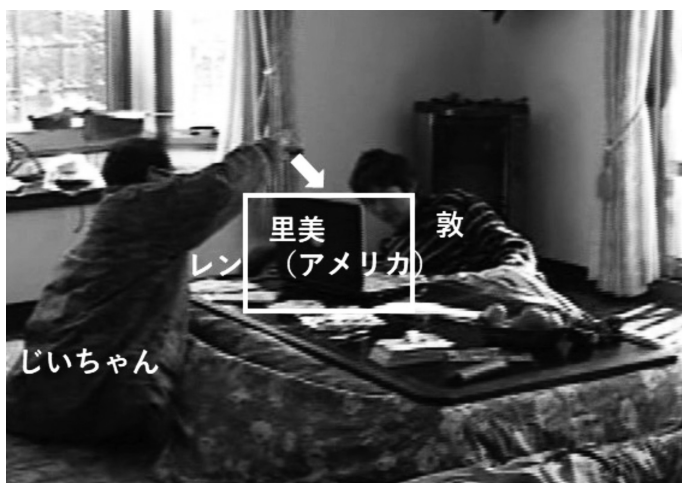


図3 じいちゃん指さし(9行目)

断片 (1)、断片 (2) では、里美がウェブカメラの前に再び現れると、聡子の促し (2 行目) をきっかけに、大人が協働して二人の子ども達を、里美の映る画面の方へ誘導する。ノートパソコンの画面の上部には、小型ウェブカメラが内蔵されているが、ウェブカメラが映し出す視野は狭く、こたつの周りをすべて同時に映し出すことは不可能である。そのため、聡子は、結太を、敦とじいちゃんは、レンに声をかけ、子ども達がまず里美が映っている画面のほうに近づくように促している。

大人達の追隨的な働きかけにもかかわらず、子ども達はなかなかこたつ周辺には集合しない。ところが、敦がノートパソコンの向きを回転させると、子ども達はそれに応えて、こたつの周りに集まってくる。断片 (3) ではレンの両親は、じいちゃんの左サイドに寝そべっていたレンを、画面のほうに促す。「レン君 (.) ほれちゃんとみてみ」 (10 行目) と敦が言うと、すぐに聡子も「レン君里美いた? レン君」 (12 行目) とレンの注意を里美の方に向けようと促す。敦は、13 行目で、ノートパソコンの画面を、じいちゃんの左サイドの床に寝そべっていたレンに向けて動かすが、すぐにその追跡をさけるように、じいちゃんをまたいで、聡子の方へ移動してしまう。敦はそれと同時に、レンの方向へさらにノートパソコンを回転させる。聡子は、「里美おった?」 (18 行目) と再び声をかけるが、それと同時に、結太がノートパソコンのはず向かいにやってきて座る (19 行目)。すると、レンも続いて、敦の隣にやってきて里美をのぞき込むように座る (図 4)。

断片 (3): 断片 (2) 続き

- |       |                         |
|-------|-------------------------|
| 10 敦  | レン君 (.) ほれちゃんとおるからみてみ = |
| 11 レン | = [ ((じいちゃんの膝の上に乗る))    |
| 12 聡子 | = [ レン君里美いた? レン君        |
| 13 敦  | [ ((ノートパソコンをレンに向ける))    |
| 14 レン | [ ((じいちゃんをまたぎ聡子の方へ移動))  |
| 15 聡子 | [ 里美:                   |

- 16 レン [ ((データ画面左の方へ消える))  
 17 敦 [ ((ノートパソコンを回転させる))  
 18 聡子 里美 [ おった？  
 19 結太 [ ((里美の向いに座る)) =  
 20 聡子 = あ (.) 結くん里美よ :: さ : と : み  
 21 じいちゃん レン君おったよ  
 ((寝そべる))  
 22 レン ((敦の隣に座る))

図 4



図 4 団らん陣形

断片 (1) ～ (3) までの会話で、大人が子どもを促す際、「ノートパソコンを見なさい」や「画面の前に行きなさい」といった、デジタル機器の道具名を発話の中で使用していない点は興味深い。直接、ウェブカメラの向こうにいる叔母の里美の名前に言及し、里美がいたか、里美が見えたかと働きかけているのである。さらに、敦が、自分の前に向けていたノートパソコンの画面を、回転させ、図 4 のように、設置することで、こたつ全面に、里美のバーチャルな操作領域が設置され、こたつを囲んで、レン、結

太、里美を中心とした団らんの陣形が構築されるのである。

このことから、ノートパソコンが、単に村野家の居間の空間と、里美のアメリカの家の空間を視覚的に媒介する道具である以上に、里美の存在の一部となって、村野家のこたつを囲んだ団らんの場に組み込まれているといえる<sup>2</sup>。

また、聡子主導で、レン、結太への促し発話が始まった点も興味深い。村野家では、長男の敦とその妻の聡子が、きょうだいの中でコンピュータに最も詳しいため、村野家のそれぞれの家の、インターネットやメディア環境を整え、皆がいつでも同じようにインターネットを介して接続できるように調節している。敦と聡子は、村野家のメディア環境整備を担当する役割を担っているのである。聡子が、自分の子どものレンだけでなく甥にあたる結太も同様に、里美の映るノートパソコンの方へ促していることは、こうした聡子のメディア環境の整備を担うリーダーシップを指標していると考えられる。

## 6.2. ウェブカメラの日常環境への埋め込み

6.1 節では、焦点のさだまらない相互作用の状態が、焦点の定まった相互作用に変化し、団らんの陣形が形成されるまでのプロセスを詳細に分析した。特に、発話による促しに加え、ノートパソコンの移動がきっかけとなり、団らんの陣形が構築された。本節では、ウェブカメラの使用に必要な設備が、日常環境へどのように組み込まれているのかを観察し、道具と環境、コミュニケーションの相関関係を考察する。

分析するデータは、村野家の祖父母と、敦の家族が、広島と東京で、ウェブカメラをつなぎ、食事の時間を共有する場面からの断片である。2 才半のレンは初めて両親と離れ、一人で祖父母の家で数日過ごしている。聡子によれば、2 才半で、親から離れて子どもを泊まらせても、ウェブカメラでの会話を定期的に持てば、安心できると考えたという。実際、朝と夕方、に時間を合わせ、一日二回、ウェブカメラで会話をしていた。特に夕方は、

それぞれの家で食事をとっていることが多かった。高齢者が、遠隔地の家族とビデオ会話を通して食事時間を合わせる共食活動は、高齢者の主観的な幸福度が上昇することが明らかになっている（徳永ら 2017、徳永 2022）。村野家の場合は、高齢者でなく、2才半の子どもであっても、ビデオ会話を通じた共食が、子どもの安心感構築につながる可能性を示唆している。

図5はそのような夕方のビデオ会話における各家庭の食卓のレイアウトをあらわしたものである。広島は祖父母宅では、ノートパソコンを食卓に置き、ウェブカメラ中央にレンが座り、両脇に祖父母が着席している。東京でも、両親が食卓の両脇に座り、レンがいつも座る場所と平行になるように、ウェブカメラを置いて大型テレビモニターに広島の様子を映している。東京の敦・聡子宅では、通常テレビモニターの左脇に、コンピュータ用のデスクスペースが設置されているが、そこから配線を移動させ、テレビモニターにコンピュータの画面が拡大して映されている。

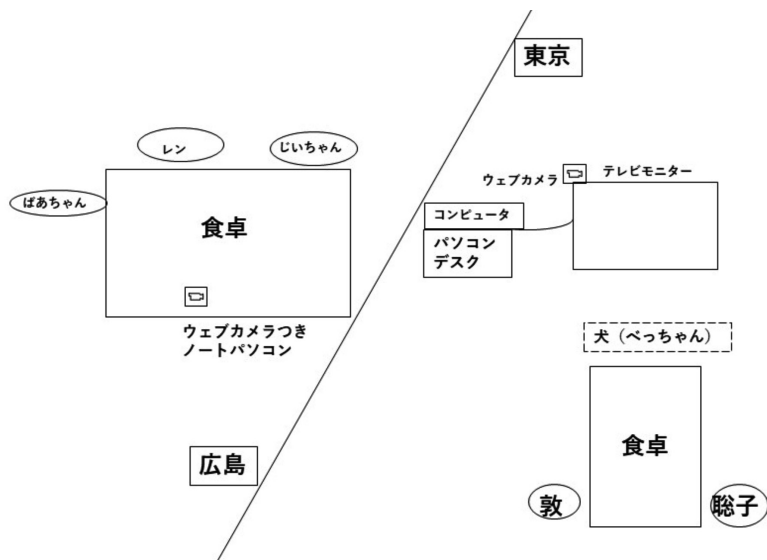


図5 村野家の遠隔共食時のレイアウト

コンピュータやインターネットなど、現代に急速に発達したデジタル機

器は、遠く的环境を接続するための単なる道具ではない。道具の社会的意味や、コミュニケーションに与える影響については、様々なアプローチで議論されてきた。言語人類学の分野では、道具は環境と人間を媒介する文化的道具 (Duranti 1997) であり、道具によって、人間は環境との関わり方に違いがうまれる。すなわち、私たちは道具の使い方から、参加者がどのように社会と関わるっているかを理解することができるといえる。近年のコミュニケーション研究の分野では、人間とデジタル機器の密接な距離感を、社会活動を補てつする人工物 (prosthesis) とする考え方がある (Mey 2000)。例えば足を失った場合に義足を装着することで、足の機能を持つことができるように、現代のデジタル機器は、人間の社会生活の機能で足りない部分を補う役割があるというものである。

しかし、単に、人間が瞬時に遠方の空間に移動できないので、「インターネット」や「コンピュータ」の持つ機能で、遠方空間と接続しているというわけではない。図3の部屋のレイアウトでは、広島のお祖母家でも、東京でも、ビデオ会話を投射するコンピュータに合わせるのではなく、通常の、すなわち対面時の食卓使用の構造や、参加者の身体配置にビデオ会話を合わせている点が興味深い。すなわち、両空間ともビデオ会話のための設備を、食卓を中心とした日常的な環境に埋め込んでいるといえる。Keating (2005) では、お年寄りのビデオ会話を分析し、道具を媒体物とする、道具—環境—人間の三角形に疑問を呈している。道具に合わせて、手話の構造を自在に変形させる様子から、ウェブカメラと手話話者の関係は密接であることがわかる。Keating は、こうした道具と人間の包括的な関係をホモ・プロセティカス (Homo prostheticus) と呼んでる。また、Merchant & O'Donohoe (2018) では、イギリスの若者のスマートフォンの使用実態調査から、若者とスマートフォンの関係も1つのホモ・プロセティカスと捉えられることを指摘してる。このような視点にたつと村野家のデータからも、ウェブカメラやコンピュータは、人間と環境を媒介する道具ではなく、家族関係そのものを形作る要素の一つといえる。

### 6.3. 団らん構築における発話調節

6.1 節、6.2 節では、主に、参加者の身体動作の調節と環境整備の手続きが、団らんの場を構築する様子を表していた。本節では、村野家の共食場で、発話の調節により、二つの食卓の隔たりを認識しつつ、一つの団らんの場を構築する手続きを分析する。

断片 (4) は図 5 で、村野家の祖父母と、レイの両親が、夕食を食べながらビデオ会話を始める冒頭部分のやりとりである。この会話が録音された日は、祖父母の家では、ウェブカメラを接続する直前から、すでに夕食を食べ始めていたのに対し、レイの両親は、食事の準備をしている最中にウェブカメラを接続した。

ウェブカメラの接続時の、食事活動のずれは、レイへの働きかけを通して調節される。食事の準備が終わり、食べ始める頃になると、聡子が「ママ達もいただきます(.) レン君は?」(1 行目) と、促す。レンのいる広島では、祖父母と共にレンはすでに食べ始めていることを認識しつつ、レンの両親が食べ始めることを宣言している。この時点での「レン君は?」の促しは、レンに宛てられているが、ばあちゃんが代わりに返答の候補を「言うちゃってママに」(2 行目)「おあがりなさいいう」(4 行目) と、提示している。すると、5 行目で、聡子は、再び「レン君いただきますした?」と、促しをくり返す。すなわち、「おあがりなさい」は、聡子の求める返答ではなかったと考えられる。くり返された聡子の促しに、ばあちゃんは「あっくん(敦)も食べるんだって」(8 行目) と、両親がこれから食事を開始することを確認する発話を提示する。敦はそれに対し、「レン君も食べて ::」(10 行目) と、一緒に食べることを明示的に要求する。こうした親の指示に対する応答を引き出すため、じいちゃんは箸で食べ物をつまみ、レンの口へ運んだり(12 行目)、「お肉お肉」(16 行目) と、肉を食べよう、レンに促したりする。レンは、東京の自宅で飼っているペットの犬を見つけ、気をとられているが、18 行目で両手を合わせる仕草をする。聡子がすぐさま「いただきますね」(19 行目) とレンの仕草を認識したことを表す。す



なわち、「レン君いただきますした？」(5行目)という促しへの返答として、レンに手を合わせていただきますという儀礼的挨拶をさせることが期待されていたことがわかる。

## 断片 (4)

東京	広島
1. 聡子 ママ達も <u>いただきます</u> (.) レン君は？	
2.	ばあちゃん 言うちゃってママに (レンに向く；袖に触る))
3.	(0.4)
4.	おあがりなさいいう
5. レン君いただきますした？	
6.	大きい声 ( ) 聞こえんのよ
7.	レン ((牛乳を飲む))
8.	ばあちゃん あっくんも食べるんだって (席から立ち上がり左へ；画面から消える))
9. 敦 食べるよ ::	
10. レン君も食べて ::	
11.	レン ちょっと変なのいたよ = (牛乳カップを置く))
12. =[ うん	じいちゃん =[ ((箸で食べ物をつまみレンの口元へ運ぶ))
13.	レン べっちゃん ( ) よ
14. 聡子 うんべっちゃんいたね：	
15.	((左手を挙げて振る))
16.	じいちゃん お肉お肉
17. べっちゃんもう食べたよ レン君	
18.	レン ((両手を合わせる)) =
19. =いただきますね	

断片(4)で示された、食事開始時のあいさつ表現の交渉の手続きは、参加者が、それぞれの食事の場に、ウェブカメラの向こうの参加者を位置づけようと試みているといえる。ばあちゃんの「おあがりなさいいう」(4行目)という返答の候補は、「いただきますーおあがりなさい(めしあがれ)」のあいさつ表現の第二ペアであり、食事を調理した者が提示できる表現であると考えられる。すなわち、ばあちゃんは、広島では、自分が調理をしてレンに食べさせていることから、その場に聡子の「いただきます」を位置づけていると考えられる。一方聡子は、レンが両手を合わせる仕草をしたことで、「いただきますね」(19行目)と、適切なあいさつを実践したことが認められる。すなわち、聡子はレンがすでに食事を開始していることを認識しているものの(1行目)、聡子が「いただきます」の挨拶を開始するタイミングにあわせて、適切な仕草をレンにもさせることで、東京の食卓の団らんの場に、レンを位置づけようとしているのである。

前述したように、レンは初めて親元を離れて、祖父母宅に滞在しており、祖父母も、両親も、滞在中はレンが寂しい思いをしないよう、頻繁にウェブカメラを通じて会話をしている。聡子も祖父母も、自分のいる空間で展開する団らんの場に、相互行為の重心をうつし、ウェブカメラの向こうの参加者を実空間に位置づけることで、参加者間の近接性を示していると考えられる。

## 7. 終わりに

本論では、遠方に暮らしている異世代・異世帯間のウェブカメラを介した家族会話のデータを分析し、遠隔地間の家族が団らんの場を構築する手続きを明らかにした。食卓やこたつといった、人が自然にあつまる場所に沿って、参加者は一時的に団らん陣形を形成する。その成立には、参加者が、お互いの発話や動作を観察し、適切な場所にウェブカメラを動かし、座位を確保することが重要である。また、その調節の手続きにより、ウェブカメラやデジタル機器は、日常の環境へ取り込まれていることが示唆さ

れた。

村野家の場合、ウェブカメラを介した団らんの場の形成はとてもスムーズに行われている。これは、日頃から、どの世帯でも、積極的にウェブカメラやデジタル機器を使っていることと関係があるであろう。敦と聡子と中心に、祖父母も、他のきょうだいの世帯も、協力して、家族間のメディア環境を整備している。

ウェブカメラを介した団らんの場の構築により、ウェブカメラのような新しい道具は、培った家族実践を引き継ぎつつ、新たな家族関係の機会を与えているといえる。長男を中心とした三世代同居が家のつながりを継続する典型的な形であった時代に培われた、家族間の縦と横のつながりは、ウェブカメラを介した団らんの場を持つことで、新たな活動となって形を変えて存続しているといえるのではないだろうか。

#### 書き起こし記号

<u>下線</u>	音の強さを下線で表す
::	コロンは音が伸ばされていることを表す
=	二つの発話が途切れなく続いている時、一つ目の終わり と二つ目の頭に符号記号を入れる
(.)	0.2 秒以下の短い間を表す
(数字)	0.2 秒以上の間合いを表す
(( ))	注記や観察の説明を表す
[	発話の重なるの開始時点を表す

#### 注

1 本研究の協力者の名前は仮名である。筆者が、実際の呼び名のニュアンスを残すような仮名を考えて実際の呼び名や本名を置き換えた。

2 2 行目で聡子が「結くん (.) ほら里美にあげましておめでとう言った？」と新年の挨拶を促すが、アメリカではまだ新年を迎えていない時刻であったため、挨拶は保留される。

#### 参考文献

坊農真弓 (2009). 「F 陣形」 坊農真弓・高梨克也・人工知能学会 (編) 『多人数イン

- タラクシヨンの分析方法』172-186. オーム社
- Cook, Susan E. (2004). New technologies and language change: toward an anthropology of linguistic frontiers. *Annual Review of Anthropology* 33, 103-115.
- Crystal, David. (2001). *Language and the internet*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Duranti, Alessandro. (1997). *Linguistic anthropology*. Cambridge University Press.
- 藤井洋子. (2020). 「日本語の「場」志向性と述語主義を考える——英語との比較から——」井出祥子・藤井洋子(編)『場とことばの諸相』61-104. ひつじ書房
- Goffman, Erving. (1961). *Encounters: Two studies in the sociology of interaction*. Indianapolis: Bobbs-Merrill.
- 井出里咲子・砂川千穂・山口征孝(2019)『言語人類学への招待』ひつじ書房
- Ito, Mizuko, & Okabe, Daisuke. (2005). Technosocial situations: Emergent structurings of mobile e-mail use. In M. Ito, M. Matsuda, & D. Okabe (Eds.), *Personal, portable, pedestrian: Mobile phones in Japanese life*, pp. 257-276. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Keating, Elizabeth. (2005). Homo prostheticus: Problematising the notion of activity and computer-mediated interaction. *Discourse Studies*, 7 (4), 527-545.
- Kendon, Adam. (1990) *Conducting interaction: Patterns of behavior in focused encounters*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lucas, Ceil, Mirus, Gene, Palmer, Jeffrey Levi, Roessler, Nicholas James, & Frost, Adam. (2013). The effect of new technologies on Sign Language research. *Sign Language Studies*, 13 (4), 541-564.
- Marchant, Caroline, & Stephanie O'Donohoe. (2018), Homo prostheticus? Inter corporeality and the emerging adult-smartphone assemblage, *Information Technology & People*. 32 (2), 453-474.
- 牧野遼作 (2022). 「F 陣形システム再考——環境に応接した身体配置」牧野遼作・砂川千穂・徳永弘子(編) (2022)『外界と対峙する』2-27. ひつじ書房.
- 牧野遼作・砂川千穂・徳永弘子(編) (2022)『外界と対峙する』ひつじ書房.
- Mey, Jacob L. (2000). The computer as prosthesis: Reflections on the use of a metaphor. *Hermes, Journal of Linguistics*, 24: 15-30.
- Ochs, Elinor & Taylor, C. The father knows best: Dynamic in family dinner narratives. In K. Hall (Ed.), *Gender Articulated: Language and the Socially Constructed Self*. pp.97-121. Routledge.
- 岡田祥平・岡崎博紀・高木智世・生越直樹(2022) 巻頭言 特集「コロナ禍」と社会言語科学. 1-5. 社会言語学 25 (1) , 1-5.
- 表 真美 (2010)『食卓と家族——家族団らんの歴史的変遷』東京：世界思想社.
- 砂川 千穂 (2017). 「第 5 章 空間をまたいだ家族のコミュニケーションンスカイプ・ビデオ会話を事例に——」片岡邦好・池田佳子・秦かおり(編)『コミュニケーションを枠づける——参与・関与の不均衡と多様性』91-108. 東京：くろし

お出版.

- Sunakawa, Chiho. (2020). Chapter 7 Familial bonding: the establishment of co-presence in webcam-mediated interactions. In Ide, R. & Hata, K. (eds.), *Bonding through context: Language and interactional alignment in Japanese situated discourse*, pp. 147–172. John Benjamins Publishing Company.
- 徳永弘子 (2022). 「食事」が<sup>a</sup>つなぐ遠隔地間親子コミュニケーション. 牧野遼作・砂川千穂・徳永弘子 (編) 『外界と対峙する』 52–73. ひつじ書房.
- Wilson, Samuel M., & Peterson, Leighton C. (2002). The anthropology of online communities. *Annual Review of Anthropology* 31, 449–467.

